

【事例報告】 非常勤園芸療法士から見た 園芸療法の効果

横田優子

社会福祉法人桑の実園福祉会
夜間型デイサービスセンター灯里

1 施設概要

「娯楽こそ最大のリハビリ」をテーマに、サービス提供をしている。

2 参加者の特徴

80代半ばの女性が多い。要介護度：要支援1～要介護3。外出、他者との交流の機会が少ない利用者が多い。心身機能を維持したい（してもらいたい）、という本人・家族の要望がある。

3 園芸療法活動目標

①他者とのコミュニケーションを活発にし、施設内で友人をつくる。②楽しい雰囲気の活動で、無理なく手指や体を動かす。

4 活動形態

集団（7名）。セミクローズド。支援職員1～2名。毎月1回午後1時間実施。

5 活動における工夫

道具の共有、作品披露の時間を設ける、隣の参加者を意識させるプログラムの提供など「仲間」を意識する機会を多くする。

6 主な成果

【利用者】①利用者間のコミュニケーションが増加した。②屋外に出る機会が増加した。

【施設職員】①植物の成長を楽しみにし、癒される。②利用者との外出機会が増加した。③職場の雰囲気がよくなった。（アンケート結果より）

7 事例

事例①

デイサービス利用に対して強い拒絶のあった参加者が短期間で施設になじみ、継続利用に至った事例：何とか説得して通所した初日にハートの匂い袋づくりに参加した結果、通常施設利用に慣れ、通所が定着するのに必要な回数（2～3回）より少なく、翌週から週1回の継続利用に至っている。



事例②

他の活動には消極的であった利用者がフラワーアレンジメントでは積極的に関与することができた事例：他のレクリエーションでは後方で車いすに座っているだけだった利用者が初めて参加した活動の中で、材料選びの場面で積極的に手を伸ばし、「楽しかった。ありがとう。」と手を合わせて満足感を表した。入職まもない職員は「表情が乏しく、意思表示もされず、失礼ながらできることの少ない方だと思っていた。園芸活動では笑顔や、積極的な面も見られ驚いた。先入観を持つてはいけないとつくづく感じた。」と話した。



事例③

活動参加に対し否定的発言の多かった利用者の

事例：ワイヤリングをしておくなど参加者にとって難しい作業が簡単になるように下準備をしておくことにより、できる作業を楽しみ満足感を得ることができた。さらに興味のあるプログラムでは自発的に活動することができた。

事例④

配偶者を亡くして間もない参加者の事例：カラオケにはまだ参加する心境ではないと述べた参加者が心穏やかにフラワーアレンジメントを楽しむことができた。

8 考察

園芸作業は、平易な動作の組み合わせが多く、作業全ては無理でも、できる場面が必ずあり、できない（できにくい）部分も支援があれば、可能になる。植物の視覚的訴求力から思わず手が伸びる、変化（成長）／収穫への期待感を伴う活動である、他のレクリエーションとは異なり、選択の自由が得やすいことが参加者のプラスの変化に繋がると考えられる。また、植物のある環境は、人の心を穏やかにし、新規参加者を受容しやすい雰囲気を作り、新規参加者も活動に入りやすい。単なる園芸活動に留めず、「仲間」を意識する場面を多く組み込むことにより、コミュニケーションの機会が増え、参加者にとって快適な居場所が生まれ、継続通所へと繋がる。利用者が早期に施設になじむきっかけとして有効である他、他施設との差別化という点で役立つ。利用者のプラス変化は職員にも好影響をもたらす。

9 課題

非常勤では、植物の継続的管理が難しく、単発的プログラムになりがちである。継続的な栽培プログラムや持続可能な環境整備を行う上で、ボランティアのコーディネートや施設職員との連携が求められる。